

漢代の「史書」

西川利文

〔抄録〕

漢代の「史書」は、一般的には書体（隸書や大篆）を意味すると考えられているが、一方で「史書」＝官文書とする異説があった。張家山漢簡・史律の釈文が公表されると、そこに見られる「史書」をめぐる、文献史料とのかかわりで議論が活発化した。しかしそれでも書体説が大勢を占めているようであるが、私見では史律の「史書」は従来の方ではとらえきれないものだと考える。この点については以前に指摘しており、本稿では文献史料に

見える「史書」を再点検する。そこから、従来から見解が分かれるのは、文献史料の「史書」が時期によって、その意味する内容が異なることに一因があることを指摘し、新たな「史書」に対する観点を提示する。

キーワード 漢代、史書、聡慧（聡恵）、小学、官文書

はじめに

筆者は以前に、張家山漢簡「二年律令」に含まれる史律（簡四七四～四八七）について分析し、それが奉常（太常）所属の大史（太史）・大卜（太卜）・大祝（太祝）に属する史・卜・祝という、国家の儀礼を掌る専門職の属吏を養成する制度であることを指摘した。そしてそこに見える「史書」は、同じく史律に見える「十五篇」「卜書」

「祝十四章」などととも、専門職養成のための書物（教科書）ではないかと推測した。^①ただし史律の「史書」は、史学童ではなく、「卜書」とともに卜学童が習得すべきものとして位置づけられるから、卜養成に関わる術数関係の書物ではないかと推測した。^②

この推測の当否はしばらくおくとして、周知のように史律の内容は、『漢書』卷三〇藝文志・小学条の蕭何の作った律（以下「蕭何律」とする）や、『説文解字』卷一五上・許慎序の「尉律」と類似する部分

がある。その結果、史律も、この二つの文献史料と関連させて、書記官としての史の養成に関連するものと考えられ、また「史書」についても、同様に二つの文献史料との関連で篆書や隸書といった書体を意味するものと考えるのが、一般的なようである。^③しかし史律から見ると、それは奉常所属官府の属吏(専門官)を養成する制度であって、書記官としての史を養成することを第一の目的としたものではない。^④

また「史書」＝隸書説を唱えるのは、銭大昕や段玉裁といった清朝の考証学者であって、『漢書』(応劭・臣瓚)や『後漢書』(李賢)そして『資治通鑑』(胡三省)に施される「史書」に対する注からは、必ずしもそれが書体を指していたと解釈することはできないのである。銭大昕らは、恐らくこれら「史書」の注を書体と誤解して、書体説を立てたと考えられるのである。^⑤従って、文献の「史書」に施される解釈を、自明の前提として論を立てることはできないと考える。^⑥

さて、文献史料の「史書」の解釈については、書体説以外に、識字書(『史籀篇』や『大篆』など)・『太史書』という専門書説、あるいは「史書」という官府で扱う文書(官文書)説など多様な説がある。^⑦これらの説の中からどれか一つを正解として抽出するのではなく、場面面で違う意味を持っていると考えることはできないだろうか。それは、例えば「史書」がやがて歴史書を指すようになるのと同じく、それ以前においても、時期による意味内容の変化を想定することもできる。^⑧そこで本稿では、「史書」の意味の多様性と時期的な変化という観点で「史書」を検討してみることにする。

一 「史書」＝書体説を物語るとされる事例の検討

史書が書体や文字を意味することを示唆する事例として引かれるのが、次の胡昭に関する事例だろう。『三国志』卷一「管寧伝」に附される胡昭の伝として、

初め〔胡〕昭、史書を善くし、鍾繇・邯鄲淳・衛觐・韋誕と並びに名有り、尺牘の迹、動に模楷とせらる(初、昭善史書、与鍾繇・邯鄲淳・衛觐・韋誕並有名、尺牘之迹、動見模楷焉)。

とある。胡昭とともに名前の挙がる人物は、衛恒『四体書勢』(『晋書』卷三六「衛瓘伝」などによると、いずれも古文・篆書・行書等の分野で専門家として知られ、まさに「模楷」といえる者たちばかりである。そうすると、その中の一人の胡昭が善くしたとされる「史書」も、書体や文字に関する語彙だと考えることもできる。

しかしこの「史書」が必ずしも隸書を指すとはいえないとする説もある。盧弼は『三国志集解』の当該箇所^⑨の考証として、銭大昕の説を引いたうえで、

弼按ずるに、銭氏、史書は即ち隸書と謂うは、一説を備う可し。惟だ胡・鍾・衛・韋・邯鄲は、皆な千古の書家に属し、僅かに能く字を識りて隸書を作す者と、相い提して並びに論ずる能わず。竹汀(＝銭大昕)の考訂は、夙に精審を称するも、此れは則ち筆鋒を騁して、未だ事実を顧みざるに似たり(弼按、銭氏謂史書即隸書、可備一説。惟胡・鍾・衛・韋・邯鄲、皆属千古書家、不能与僅能識字作隸書者、相提並論。竹汀考訂、夙称精審、此則似騁

筆鋒、未顧事实矣。

という。すなわち、錢大昕の「史書」説は一説としては承認できるが、ここに挙がっている人物はいずれも能書家であつて、ようやく隸書を書ける者と同列に論ずることはできず、恐らく校訂に定評のある錢大昕も事実を考えずに、思わず筆が滑つてしまったのだらうと、錢大昕の解釈に疑義を呈している^⑩。ただし、大西克也氏が指摘するように「史書」が、公式書体の隸書であつて俗的な隸書ではないとすれば、盧弼の指摘も「言い過ぎ」の感も免れまい。

胡昭と類似した例をもう一つ掲げておこう。『後漢書』伝四宗室四王三侯列伝に、

睦、能く文を属^つり、春秋旨義終始論及び賦頌数十篇を作る。又た史書を善くし、当世、以て楷則と為す。病に寝るに及び、帝、駙馬もて草書尺牘十首を作らしむ（睦能属文、作春秋旨義終始論及賦頌数十篇。又善史書、当世以為楷則。及寢病、帝駙馬令作草書尺牘十首）。

とある北海敬王劉睦は、「史書」を善くしたことによつて「楷則」と称された。その成果として「草書尺牘十首」があるから、草書を得意としたと考えられる。これを裏付けるように『東觀漢記』（『太平御覽』卷七四九）では、

北海敬王睦、草書を善くし、病に臨み、明帝、駙馬もて草書尺牘十首を作らしむ（北海敬王睦、善草書、臨病、明帝駙馬令作草書尺牘十首焉）。

とあつて、『後漢書』で「史書」とされる部分が「草書」になつてい

る。とすれば、「史書」は草書を指すと考えられることもできる。これと同じ見方で胡昭の場合を考えれば、『四体書勢』で彼は行書の専門家とされるから、その「史書」は行書を意味するとも考えられる^⑪。すなわち、後漢時代には「史書」がある書体を指す語彙だったとしても、特定の一つを指すものではなかった可能性があるのである。

「史書」が別の史料では言い換えられている例を、さらに紹介しておこう。『東觀漢記』（『太平御覽』卷一四四）に、

孝和陰皇后、聰慧敏達にして才能有り、史書を善くす（孝和陰皇后、聰慧敏達、有才能、善史書）。

と記される和帝の陰皇后は、『後漢書』紀一〇皇后紀では、

后、少くして聰慧、書藝を善くす（后少聰慧、善書藝）。

と記され、「史書」が「書藝」に言い換えられている。すなわち「史書」「書藝」なのであり、「書藝」が文字通り書体や文字に関する才能だとすれば、「史書」もそれに関連する言葉だということになる。

さらに「史書」が書体との関連で語られていると考えられる例として、『後漢書』伝四〇孝明八王列伝に、

永平九年（六六年）、号の重熹王を賜り、十五年、楽成王に封ぜらる。党、聰恵にして、史書を善くし、文字を正すを喜^こむ。肅宗と同年にして、尤も相い親愛す（永平九年賜号重熹王、十五年封楽成王。党聰恵、善史書、喜正文字。与肅宗同年、尤相親愛）。

とある楽成靖王劉党がいる。彼は、「文字」を正すこと（文字の校訂か）を好んだことと関連して、「史書」を善くしたことが語られ、また劉睦とも同時期であることから、この場合も書体や文字に関わるこ

とだとも考えられる。もつともこの「文字」が何を指すかは、右の文章から直ちには判断できない。

いずれにしても、以上に掲げた書体との関連性を伺える文献に残る「史書」の記事からは、それが(公式書体としての)隸書だと判断できるものはないことを確認しておきたい。また上に掲げた四つ事例は漢代の「史書」の一部であって、ここから残るすべての「史書」が、書体や文字に関わる言葉だと断定してしまうことも躊躇される。

ところで前に掲げた北海敬王劉睦は、「史書」の才能と並んで文学的才能(「能属文」)も持っていて「賦頌数十篇」を著したという。彼の場合は、文学的才能と「史書」との間で文章が切れているので、両者の関連性は薄そうであるが、文学的才能とともに語られる「史書」の例もある。それは、『後漢書』伝四十五章帝八王伝に、

〔安〕帝生む所の母・左姫、字は小娥。……小娥史書を善くし、

辞賦を喜む(〔安〕帝所生母左姫、字小娥。……小娥善史書、喜

辞賦)。

と記される、安帝の生母・左姫である。彼女の場合、「史書」を善くするとともに「辞賦」も好んでいる。「史書」と文学的な才能との関連を示唆する事例である。このように、必ずしも直接に書体と結びつかない可能性のある「史書」の事例があることに注意したい。

「史書」のみに注目していても議論の繰り返しになる恐れがあるので、ここで視点を変えて「史書」をよくした者たちが、他にどのような特徴を持っているのかを検討してみよう。

二 若年者と「史書」

まず「史書」に関連する史料を見ると、若年で「史書」に通じた(親しんだ)という記載が目につく。例えば順烈梁皇后(『後漢書』紀一〇皇后紀下)は、

少くして女工を善くし、史書を好み、九歳にして能く論語を誦し、韓詩を治め、大義略ぼ挙ぐ(少善女工、好史書、九歳能誦論語、治韓詩、大義略挙)。

とあって、九歳で『論語』を誦したというから、「史書」を好んだというのはそれ以前のことになる。また前の陰皇后は「少くして」「書藝を善く」した(『後漢書』)という。さらに具体的年齢を示す例もある。和熹鄧皇后(『後漢書』紀一〇皇后紀上)は、

六歳にして史書を能くし、十二にして詩・論語に通ず(六歳能史書、十二通詩・論語)。

とあって六歳で「史書」をよくしたし、安帝(『後漢書』紀五安帝紀)は、

年十歳にして、好んで史書を学ぶ。和帝、之を称し、数しば禁中に見ゆ(年十歳、好学史書、和帝称之、数見禁中)。

とあって、一〇歳で「史書」の学習を好んだといわれる。鄧皇后の六歳というのはかなり早い。梁皇后や安帝の例からすると、いずれも一〇歳以前に「史書」に通じている。ちなみに、前に掲げた劉党は、「史書」に通じた年齢は具体的にはわからないが、章帝(肅宗)と同じ年だとすれば王号を賜った永平九年(六六)には一〇歳ということ

になり、その前後に「史書」をよくした可能性がある。

「史書」が文字とのかかわりで語られる時、よく引き合いに出されるのがいわゆる「読み書き算盤」という初等教育の問題である。例えば『漢書』食貨志では、

是の月、餘子も亦た序室に在り。八歳にして小学に入り、六甲・五方・書計の事を学び、始めて室家長幼の節を知る。十五にして大学に入り、先聖の礼楽を学び、而して朝廷君臣の礼を知る（是月、餘子亦在于序室。八歳入小学、学六甲五方書計之事、始知室家長幼之節。十五入大学、学先聖礼乐、而知朝廷君臣之礼）。

とあり、また『白虎通』辟雍には、

古えは年十五にして太学に入る所以は何ぞ。以為らく八歳にして毀齒、始めて識知有り、学に入りて書計を学ぶ。七八十五にして、陰陽備わる、故に十五にして成童、志明らかにして、太学に入り、経術を学ぶ（古者所以年十五入太学何。以為八歳毀齒、始有識知、入学学書計。七八十五、陰陽備、故十五成童志明、入太学、学経術）。

とあって、いずれも八歳で「書計」の事を学ぶといわれている。その他、『漢書』藝文志・小学条や『說文解字』序などでも、（周代の国子は）八歳で小学に入り、六書の教育を受けたとする。漢代（特に後漢時代）では初等教育を受けはじめる年齢は、一般的に八歳前後だと観念されていたのである。

後漢時代の実例としては『論衡』自紀篇に、
六歳にして書を教わり、恭愿仁順にして、礼敬具備し、矜莊寂寥

として、巨人の志有り。父未だ嘗て咎せず、母未だ嘗て非らず、閭里未だ嘗て讓めず。八歳にして書館に出ず。書館は小童百人以上、皆過失を以て袒謫せられ、或は書の醜きを以て鞭を得。充は書の日に進み、又た過失無し。手書既に成り、師を辞して論語・尚書を受け、日に千字を諷ず。経明らかにして徳就り、師に謝して門を専らにし、筆を授きて奇衆し。読む所の文書も、亦た日に博多なり（六歳教書、恭愿仁順、礼敬具備、矜莊寂寥、有巨人之志。父未嘗咎、母未嘗非、閭里未嘗讓。八歳出於書館。書館小童百人以上、皆以過失袒謫、或以書醜得鞭。充書日進、又無過失。手書既成、辭師受論語・尚書、日諷千字。経明徳就、謝師而専門、援筆而衆奇。所說文書、亦日博多）。

とある王充の例がある。彼は、六歳で家庭での基礎的な教育を受けて、八歳で書館に入って初等教育を受け、それが終わると経書の教育を受けた。彼は、その間過失なくすべてをクリアしていったという。これには王充の自慢話的な部分もあるが、他の子供たちよりも優秀だったことは推測できる。いずれにしても書館への入学年齢の八歳というのは一般的なものであり、そこでの教育の具体像はもう一つ明らかにできないものの、文字が汚いと鞭を受けたとあるから、文字を美しく書くこと（書写能力）を訓練されたことは確実である。また富裕層の年中行事を記した崔寔『四民月令』（石声漢校注）の正月の項には、

農事未だ起らず、成童以上に命じて大学に入り、五経を学び、師法は備を求め、書伝を読む勿らしむ。研凍積け、幼童に命じて小学に入り、篇章を学ばしむ。女紅に命じて織布に趣かしむ（農事

未起、命成童以上入大学、学五经、師法求備、勿讀書伝。研凍釈、命幼童入小学、学篇章。命女紅趣織布)。

とあり、幼童とは一〇歳から一四歳までを指すといわれる。そしてそこで学んだ「篇章」とは「六甲・九九・急就・三倉」(同書注)を指すといわれるから、『急就篇』や『三倉』(蒼頡篇・爰歷篇・博學篇)という識字書や、九九という計算を学ぶという、小学での初等教育はまさに「読み書き算盤」だった。そして同書の十一月の項では、「篇章」に加えて儒家の基礎的文獻である『孝経』『論語』も学ぶことになっている。¹⁵⁾

以上を総合すれば、八歳前後で小学に入り「読み書き算盤」の初等教育を受け、一五歳からは大学に入って経書の教育を受ける。これが、一般的な知識人たちの教育課程なのであろう。そうすると、「史書」が書写能力を示すとすれば、鄧皇后の場合は六歳で修得しているからよいとしても、十歳で「史書」を学んだ安帝や標準の八歳前後で「史書」を好んだとされる梁皇后などは、それを特筆する必要があるのだろうかとの疑問を抱く。もつとも錢大昕のいうように、これまで挙げてきた「史書」の例のほとんどが皇帝・諸侯王や皇后など皇室関係者であり、彼らは隸書や楷書を知るだけで事足りる、と判断することもできる。¹⁶⁾

しかし彼らの「史書」の能力は、一般的な初等教育のレベルではなく、より高いものであったと考えられる。それを裏付けするのが、若いことと並んで記されることのある「聡慧」「聡恵」という評価である。例えば和帝の陰皇后は「少くして聡慧」(『後漢書』)とか「聡慧敏達」

(『東觀漢記』)という評価を得ている。また楽成靖王劉党も「聡恵」という評価を受けているし、順烈梁皇后も、後に皇后に立てられた時の記載(『後漢書』皇后紀下)に、

后既に少くして聡恵、深く前世の得失を覽、徳を以て進むと雖も、敢て驕専の心有らず、日月の譴を見わす毎に、輒ち服を降して愆を求む(后既少聡恵、深覽前世得失、雖以德進、不敢有驕専之心、每日月見譴、輒降服求愆)。

とある。この「聡恵(聡慧)」とは「さとかしい」ことを意味する語であるが、特に若年(「少くして」)で秀でた能力を示す者に冠せられるようである。例えば八歳で皇帝に即位した質帝は「少而聡慧」(『後漢書』伝二四梁冀伝)といわれ、それを嫌った梁冀(『後漢書』伝五三李固伝「冀忌帝聡慧」)は質帝を殺害する。「聡慧(聡恵)」とは、時の実力者もやり込めるほどの能力を若年で持っていた、いわば早熟の者に対する評価の語だと考えられる。

少し時代は下るが、諸葛亮は自分の息子の諸葛瞻を評して「瞻今已に八歳、聡慧にして愛す可きも、其の早成なるを嫌う。重器と為らざるを恐るのみ(瞻今已八歳、聡慧可愛、嫌其早成。恐不為重器耳)」(『三国志』卷三五諸葛亮伝)という。また孫権の息子の孫亮も「少聡慧」(『三国志』卷六四孫綝伝注に引く孫盛の言)といわれ、夏侯淵の息子の夏侯栄も「弟の栄、字は幼権。幼くして聡恵、七歳にして能く文を属り、書を誦むこと日に千言、経目にすれば輒ち之を識る(弟栄、字幼権。幼聡恵、七歳能属文、誦書日千言、経目輒識之)」(『三国志』卷九夏侯淵伝注引『世語』)とある。いずれも早熟の才能を評

した語といえよう。『晋書』の「聡慧（聡恵）」も同様の方向の内容を意味する事例が多い。¹⁷

そうすると「史書」の能力も、早熟の者に対する評価の語の一つといえるのではなからうか。それが具体的に何なのかを考える前に、もう少しこれまで掲げてきた事例を手がかりに、「史書」を取り巻く周辺の事象について検討しておこう。

女性の「史書」の事例を見ると、その対概念のように「女工」という語が用いられている場合がある。まずこの節の冒頭で掲げた順烈梁皇后は、「史書」ともに「女工」を善くしている。一方、和熹鄧皇后の場合は、前に示した記事に続いて、

諸兄の経伝を読む毎に、輒ち意を下して難問す。志は典籍に在り、居家の事を問わず。母常に之れを非りて曰く、「汝は女工を習いて以て衣服を供さず、乃ち更に学に務む。寧ろ当に博士に挙げらるべきや」。后母の言に違^{はば}うを重り、昼は婦業を修め、暮に経典を誦む。家人号して「諸生」と曰う（諸兄每読経伝、輒ち意難問。志在典籍、不問居家之事。母常非之、曰「汝不習女工以供衣服、乃更務学、寧当举博士邪」。后重違母言、昼修婦業、暮誦経典、家人号曰「諸生」）。

とあるように、彼女は当初は「女工」に努めずに経書の勉学に熱中したことを、母から叱責された結果、渋々ながら昼は「婦業（＝女工）」を行ったが、夜はやはり経書に打ち込んだという。この「女工」は「女功」「女紅」とも記され、『四民月令』に見えるように一般的には機織りを指し、もう少し広く裁縫等も含む女性の仕事全般（「婦業」）

を指すと考えられる。¹⁸

ところで、鄧皇后と似た逸話を持つ女性が三国・魏にいる。それは文昭甄皇后である。『三国志』卷五后妃伝の彼女の伝の注に引く『魏書』に、

年九歳にして書を喜^こみ、字を視ては輒ち識り、数しば諸兄の筆硯を用う。兄后に謂いて言く「汝当に女工を習うべし。書を用て学を為し、当に女博士と作るべきや」と。后答えて言く「聞く、古は賢女、未だ前世の成敗を学びて、以て己が誠と為さざるもの有らず。書を知らざれば、何に由て之れを見るか」と（年九歳、喜書、視字輒識、数用諸兄筆硯、兄謂后言「汝當習女工。用書為学、当作女博士邪」。后答言「聞古者賢女、未有不学前世成敗、以為己誠。不知書、何由見之」）。

とあり、彼女の場合は「書を喜み」学問ばかり精を出したことから、兄から「女工」に励むように忠告されたのである。しかし彼女の場合は鄧皇后とは異なり、兄の言に従うのではなく、昔の「賢女」は「前世の成敗」を学んで「誠め」としたものだとして反論した。この後彼女が「女工」とどのようにかわつたのかは不明だが、伝の本文では、一〇歳の時に混乱期の物価騰貴の折だから、家にある穀物を親族郷里に振給するように母に提案し、家族の者全員がそれに従ったという¹⁹から、世情を敏感に判断して行動できる聡明さがあつたといつてよいのではない。そういう意味では、「聡慧（聡恵）」との評価を受けても不思議ではない人物である。

さて甄皇后の場合、「喜書、視字輒識」とあつて書写能力に関する

記事のように見える。また「善書」は「善史書」に通じるようにも見える。しかし後に「用書為学」とあり、その「書」によって「前世成敗」を学ぶとあるから、この「書」はいずれも書籍、中でも先哲の事柄を学べる儒家系の文献を指すと考えられ、それ故に「女博士となるのか」という兄の言葉があるのだろう。これは、家事（「居家之事」）を顧みず、「典籍」に思いを致す鄧皇后に、母が「博士に選ばれたのか」といった言葉と通じると考えるからである。甄皇后は恐らく、儒家系の書籍を読むのを好み、その内容を即座に理解し、さらに兄の筆と硯を借りてその内容を書写した、ということなのであろう。すなわち甄皇后の「書」とは書体を指すのではない。それでは鄧皇后らの「史書」はどのように考えられるだろうか。

これまでたびたび取り上げてきた梁皇后は、司馬彪『統漢書』（『太平御覧』卷一三七）では、

既に女功の巧有り、尤も史書・学問の事を好む。九歳にして能く孝経・論語を誦し、遂に韓詩を治め、大義略ぼ挙ぐ（既有女功之巧、尤好史書・学問之事。九歳能誦孝経・論語、遂治韓詩、大義略挙）。

と記される。ここでは「女功の巧」と「史書・学問の事」が対置されていることに注目したい。前者が女性の役割だとすれば、後者は男性が行うことになる。これは当然のことで、本来女性が行うべき「女工」を行わず、男性の行う「史書・学問の事」に精を出したことから、鄧皇后や甄皇后は叱責を受けた。すなわち「史書」は本来、経書の学習と並んで男性が行う事なのである。梁皇后は、これを九歳になるま

でに好むようになり、九歳に達すると『孝経』や『論語』さらには『韓詩』もマスターする。この九歳という年齢は、六歳で「史書」をよくした鄧皇后が一二歳で『詩』や『論語』に通じたとされるよりも早い。もともと鄧皇后は『東觀漢記』（『太平御覧』卷六一四）によれば「七歳で『論語』を読んだ」といわれるから、梁皇后よりも早いかもしれないが、いずれにしても両者の年齢は、早熟の男性知識人の経書に通じた年齢と比べても早いことは間違いない。⁽²⁰⁾まさに「聡慧（聡恵）」なのである。

こういう観点からいえば『東觀漢記』（『太平御覧』卷九一皇王部所収）に、

年十歳にして、史書を善くし、経籍を喜ぶ。和帝甚だ喜んで焉を重んじ、号して諸生と曰う（年十歳、善史書、喜経籍、和帝甚喜重焉、号曰諸生）。

と記され、「史書」と並んで経籍もこのんだ安帝であれば、「諸生」と称するにふさわしいし、彼はさらに「聡明敏達」として「聡慧（聡恵）」に通ずるような評価を得ていることも、あながち不思議ではない。

ここまで述べてきたことから「史書」の意味内容を考えれば、幼くして聡明な者が、本格的な経書学習の前段階として学んだもので、その能力が極めて高い者だけに付される語だったといえるのではない。それをあえて特定するとすれば、特定の書体に秀でているというのではなく、文字そのものに造詣が深い、すなわち学問としての小学に秀でていることを示すのが「善史書」なのではないか。そうすると、

「史書」は小学書（識字書）ということになる。

小学については、応劭『漢官儀』（通典・卷二二設官四）で、

能く蒼頡・史籀篇に通ずれば、蘭台令史に補し、歳を満つれば、

尚書令史に補す（能通蒼頡・史籀篇、補蘭台令史、満歳、補尚書令史）。

というように、後漢末には『蒼頡』『史籀篇』という小学書（識字書）あるいは小学という学問に通じることが、属吏採用の条件の一つもなっていたことから、単に『蒼頡』『史籀篇』に記される文字を書けるというのではなく、その内容をしつかりと理解している（「能通」）ことを示すのだろう。少なくとも、「聰慧（聰恵）」という評価（劉党・陰皇后・梁皇后）や若年（安帝・鄧皇后）で「史書」に通じた者については、「史書」を小学書（識字書）と考えることができるのではなかろうか。その他の書に秀でていたとされる者（劉睦・胡昭）も、小学に通じていなければ立派な文字は書けなかったから、その「史書」も小学書（識字書）と考えることもあながち無理ではない。また情報不測の左姫は安帝の生母であるという点から考えれば、その「史書」も同様に考えられよう。

ここまで取り上げた人物は全員、後漢時代（明帝期〜献帝期）の人であった。すなわち後漢時代の「史書」は、小学書（識字書）を意味したと考えられるのである。それが前漢時代まで遡らせられるかといえば、若干微妙なところがある。例えば『漢書』卷九七外戚伝下に、

〔許〕后聰慧にして、史書を善くし、妃と為りて自り即位するに至るまで、常に上に寵せられ、後宮希に進見するを得（〔許〕后

聰慧、善史書、自為妃至即位、常寵於上、後宮希得進見）。

と記される孝成許皇后は、「聰慧」であったことからすれば、この「史書」も後漢時代的な意味と考えることもできるが、その後の学習状況が不明で、経書の学習に向かったのか判断できない。次に『漢書』卷九元帝紀に、

元帝、材藝多く、史書を善くす（元帝、多材藝、善史書）。

と記される元帝の場合は、これに続く記載が彼の音楽的能力に関わるものであつて、これまでの「史書」の範疇に属するか情報不測で判断に困る。しかし「史書」とのかかわりであり注目されることはないが、『漢書』卷七一疏広伝には、疏広が後に元帝となる皇太子の太子太傅となつてから五年たった時の記事として、

皇太子年十二にして、論語・孝経に通ず（皇太子年十二、通論語・孝経）。

とあり、元帝は皇太子時代に一二歳で『論語』『孝経』という儒家の基礎的文獻に通じたという。そうすると、元帝は「史書」の後に『論語』『孝経』を習得したとも考えられ、後漢時代と同様のものを指すと思なせるかもしれない。

しかし彼らが「史書を善くする」と評価された同時期の前漢後半期には、後漢時代の「史書」とは異なるものを意味する事例が存在する。その点を、節を改めて検討しよう。

三 前漢時代的な「史書」

まず『漢書』巻七六に、

王尊、字は子贛、涿郡高陽の人なり。少くして孤、諸父に帰し、羊を沢中に牧せしめらる。尊窃かに学問し、史書を能くす。年十三にして、求めて獄少吏と為る。数歳、太守府に給事し、詔書行事を問わるるに、尊対えざることを無し。太守之れを奇とし、除して書佐に補し、守属に署し獄を監せしむ。之を久しくして、尊病を称して去る。郡文学官に事師し、尚書・論語を治め、略ぼ大義に通ず。復た召されて守属に署されて獄を治め、郡決曹史と為る(王尊、字子贛、涿郡高陽人也。少孤、帰諸父、使牧羊沢中。尊窃学問、能史書。年十三、求為獄少吏。数歳、給事太守府、問詔書行事、尊無不对。太守奇之、除補書佐、署守属監獄。久之、尊称病去。事師郡文学官、治尚書・論語、略通大義。復召署守属治獄、為郡決曹史)。

と記される王尊は、一三歳になる以前に「史書」をよくしたので、若年で「史書」をよくする後漢時代の事例と通ずる。まさに「聡慧(聡恵)」というべき存在だろう。しかし彼は、後漢時代の事例のように皇族でもなく、また「史書」に通じた後にすぐに経書の学習に入ってもいない。幼くして父を亡くし親族を頼った彼は、羊飼いの仕事の合間を縫って「学問」に励んで「史書」をよくするようになった。ところが彼は、一三歳で自ら望んで(県の)獄少吏となり、やがて郡府に仕えるようになる。その後、一旦属吏を退き、郡の文学官に師事して

『尚書』と『論語』をマスターした後、再び郡の属吏に復帰している。形式的には「史書」学習から経書学習へ進んでいるから、後漢時代の傾向と一致しているが、その間に属吏の経験を挟んでいることは、後漢時代の例と比較して特異といえよう。

王尊は、県および郡の属吏に在任中、主に獄関係の業務を担当した。その中で、時の太守に見出されるきっかけとなったのが、「詔書行事」を問うたところ答えられないものがなく、現行の法令に明るかったことである。²⁴この点から彼の場合、「学問」「史書」の成果は、経書には結びつかず、このいわば行政処理能力に現われているといえよう。

王尊の「学問」と「史書」とのかかわりで注目したいのが、王充『論衡』巻一二程材篇の、

世俗の学問する者、経を竟めて学に明らかにして、深く古今を知るを肯んぜず。忽に一家の章句を成さんと欲す。義理略ぼ具われば、同に趨りて史書を学び、律を読み令を諷し、請奏を治作し、対向を習い、跪拜を滑習す。家成り室就れば、召して署せられて輒ち能くす。今に徇い古を顧みず、趨讎して志を存せず、競進して礼を案ぜず、経を廃して学を念わず。是を以て古経廃せられて修められず、旧学闇くして明かならず。儒者は空室に寂として、文史は朝堂に譁し(世俗学問者、不肯竟経明学、深知古今、忽欲成一家章句。義理略具、同趨学史書、読律諷令、治作請奏、習対向、滑習跪拜。家成室就、召署輒能。徇今不顧古、趨讎不存志、競進不案礼、廃経不念学。是以古経廃而不修、旧学闇而不明。儒者寂於空室、文史譁於朝堂)。

という文である。程材篇では、要領のよい文吏と悪い儒生が対比して描かれており、ここでは、世俗の「学問」する者は、経書の学習もそこそこに「史書」の学習に走り、文吏として必要な法律的知識、文書作成能力、立ち居振る舞いなどに精を出す姿が描かれる。その結果、現実的な対応が重視され、古典は顧みられなくなり、儒者はお呼びがかからず、文吏たちが役所で忙しく働くようになるという⁽²⁵⁾。

ここに記される「史書」は、経書学習の前段階として学ぶものではなく、実務能力の一環として身に付けるものとして描かれているようである。王尊の「学問」をして能くするようになった「史書」も、このようなものだったと考えられ、それ故に、後に郡文学に師事して改めて経書を学んだとのだろう。すなわち、王尊や「論衡」に記される「史書」は、行政文書＝官文書＝胡三省のいう「吏書」を指すと考えられるのである。

前漢後半期には、このような「史書」が他にも見られる。まず『漢書』巻九〇酷吏伝の嚴延年は、

然れども疾惡泰甚、中傷する者多く、尤も巧みに獄文を為り、史書を善くし、誅殺せんと欲する所は、奏、手中に成り、主簿・親近の史も聞知するを得ず。奏可して死に論ずるに、奄忽なること神の如し（然疾惡泰甚、中傷者多、尤巧為獄文、善史書、所欲誅殺、奏成於手、中主簿親近史不得聞知。奏可論死、奄忽如神）。と記され、獄文（判決文）を巧みに作成し、さらに「史書」をもよくしたので、誅殺しようと思う者は、嚴延年自身が文書を作って処理したという。「少くして法律を丞相府に学んだ（少学法律丞相府）」とい

われる彼であれば、この「史書」は事務処理上の官文書と考えることが妥当だろう。また『漢書』巻七十二貢禹伝には、

郡国、其の誅に伏すを恐れ、則ち史書に便巧にして計簿に習い能く上府を欺く者を択び、以て右職と為す。……故に俗に皆な曰う、何ぞ孝弟を以て為さん。財多くして光榮あり。何ぞ礼義を以て為さん。史書して仕宦するなり。何ぞ謹慎を以て為さん。勇猛にして官に望むなり（郡国恐伏其誅、則挾便巧史書習於計簿能欺上府者、以為右職。……故俗皆曰、何以孝弟為。財多而光榮。何以礼義為。史書而仕宦。何以謹慎為。勇猛而臨官）。

とある。これは、初元五年（前四四年）に御史大夫だった貢禹が行った元帝に対する諫言の中で、武帝後半期（前一〇年代）以降の状況として述べている。前半では、責任を問われるのを逃れるために「史書」と「計簿」（上計簿）に巧みで、上位の官府を欺く者が出世すること、後半では前半の状況を受けて、世間の言として礼儀よりも「史書」によって仕官できること、を指摘した文章である。ここでは、文書作成の巧みなものが重用されたことを物語り、この「史書」も決して肯定的なものではない。

ところで、右に引いた貢禹伝の記事の後半部分と似たものが賈誼『新書』卷三事変に、

今は有た何如、進取の時去り、并兼の勢過ぐ。胡ぞ孝弟循順を以て為さん。書を善くして吏と為のみ。胡ぞ行義礼節を以て為さん。家富みて官に出ずるのみ（今有何如、進取之時去矣、并兼之勢過矣。胡以孝弟循順為。善書而為吏耳。胡以行義礼節為。家富而出

官耳)。

とある。これは、貢禹が「海内大化」とした文帝期(前一七九〜前五七)のことに、貢禹がいうように贖罪の法を廃止し、官僚に対する賞罰を明確にすれば、天下が治まるという状況は、前漢時代には実現しなかったのかもしれない。なお、貢禹伝では「史書」となっていたものが『新書』では単に「書」となっているが、『新書』でも単に美しい文字が書けるというのではなく、しっかりと文書が書けることを意味したと考える方が、理解しやすいと考える²⁷⁾。

さて最後に、胡三省が『資治通鑑』の注で「史書」＝官文書とした「史書」の例を、『漢書』の記事によって示しておこう。それは、巻九六西域伝下・烏孫条に、

初め楚主の侍者・馮嫫、史書を能くして事に習い、嘗て漢の節を持して公主の使と為り、賞賜を城郭諸国に行うに、之れを敬信し、号して馮夫人と曰う(初、楚主侍者馮嫫能史書、習事、嘗持漢節為公主使、行賞賜於城郭諸国、敬信之、号曰馮夫人)。

とある、馮嫫の例である。彼女は漢の使節として(「持漢節」)塞外諸国を回った。その際「史書」をよくし政治向きの事柄にも通じていた(「能史書習事」)ので、各国は彼女に信頼を寄せた。従って、ここの「史書」も、単に文字がきれいに書けるというのではなく、交渉の結果をまとめる文書の作成能力が高かったと考えられるのではなかろうか。

本節で取り上げた事例は、貢禹が元帝の初元五年(前四四)となるのを除けば、前漢時代の例はほぼ宣帝期(前七四〜前四九)となる。

ただ、貢禹の事例が武帝後半期(前一〇年代以降)の実態を示しているとするれば、そこまで遡ることになる。一方下限は、『論衡』が記されたと考えられる章帝末から和帝初期の九〇年代くらいになるのか。この間「史書」は官文書を意味するものとして使われた可能性が高い。しかし、前節で見たように小学書(識字書)として使われるのは、少なくとも後漢初期の明帝期(五七〜七五)以降のことになり、元帝や許皇后の事例を含めれば、前漢の宣帝期以降ということになる。そうすると、筆者の推測通りだとすれば、官文書を意味する時期と小学書(識字書)を意味する時期が重なってしまう。これをどのように解釈するかである。

ここで思い出したいのが、後漢時代の「史書」の場合、別の語に言い換えられる事例があったことである。劉睦の場合は「史書」(『後漢書』)が「草書」(『東觀漢記』)と言い換えられたし、陰皇后の場合は「史書」(『東觀漢記』)が「書藝」(『後漢書』)と言い換えられている。また鄧皇后の場合も、『後漢書』で「史書」とされるものが、『東觀漢記』(『北堂書鈔』卷二五)では「六歲能書」というように、「史」字が省略されているのである。この点から、小学書(識字書)を示す「史書」は、それほど安定的ではなかったのではないかと考えられるのである。そしてやがて「史書」は、歴史書の意味で用いられるようになる。

ところで、班固の『漢書』は後漢初期の一世紀後半に成立した。その『漢書』に注を施した応劭は、後漢後半期(二世紀後半〜三世紀初期)の人である。応劭が注を施した理由は、後世の人のためというよ

りも、自身が『漢書』の内容で不明確な点を明らかにしたかったからであろう。そうすると「史書」も、応劭からすれば同時代的感覚からは判断しにくかったから、自身の解釈を示したのではないか。その判断しにくかった『漢書』の「史書」とは、元帝紀のものよりは、この節で取り上げた王尊・嚴延年・貢禹・馮嫺に見える「史書」の方ではなかったろうか。これについて応劭は、自身の感覚に近い「周宣王太史史籀所作大篆」という注を施した。これは、前に示したそれをマスタースれば属吏となれる『蒼頡』『史籀篇』という小学書（識字書）を意識し、さらに『漢書』藝文志・小学で班固自身が『史籀』十五篇に対して「周宣王太史作『大篆』十五篇、建武時亡六篇矣」と注を施したことも参照して、後漢初期に失われた部分も含む『大篆』一五篇こそが「史書」だと推測したのではなかろうか。しかしこの後漢時代的な発想の応劭の注は、『漢書』の「史書」の注としては不正確であった。

前漢時代的な「史書」の使い方は、班固と同時代の王充も理解していた。それ故に王充は、『論衡』の自紀篇では書館での識字学習に「史書」を採用せずに、程材篇で当時一般的であった前漢時代的な「史書」を用いたと考える。恐らく、班固や王充が生きた後漢初期（一世紀後半）から応劭の生きた後漢後半期（二世紀後半以降）までの間に、言葉の意味に大きな変化があったのではないか。その現象の最初の出現が前漢後半期であり、そこから後漢一代を通じて次第に安定していったと考えたい。

おわりに

本稿は、『漢書』『後漢書』そして『三国志』という文献史料に見える「史書」の一五例を中心に分析を行った。まず書体や文字を意味すると考えられた事例についても、それが小学書（識字書）として考えても理解できることを提示し、後漢時代の「史書」はほぼこの解釈で説明できることを確認した。その「史書」の特徴としては、おおむね若年者で聡明なる人物に対して与えられる評価であると考えられる。

このような使用法は、前漢後半期の元帝や許皇后まで遡れるが、前漢時代に大勢を占めたのは官文書を意味する「史書」であった。それは、若年や聡明さを示すものではなく、実際の政治の現場で活用できる能力を意味した。このように相反するような内容を持つ「史書」が、前漢後半期から後漢初期まで平行して行われたように見えるが、小学書（識字書）としての（後漢時代的な）「史書」は平行時期にはそれほど安定したものではなく、別の語で表されることもあった。

『周礼』には、祭祀儀礼を掌る春官宗伯に大史・小史など職名に「史」の付く、いわゆる史官が存在する一方で、「府・史・胥・徒」という各官府に一定数が配置される下級の役人が存在する。鄭玄によれば、「府・史」が「官府の長官が辟召する（其官長所自辟除）」いわゆる属吏で、「胥・徒」は「漢代の衛士のような、徭役として徴発される者（民給徭役者、今衛士矣）」であり、この属吏の史が文書の作成を行う書記官であった。すなわち『周礼』には、祭祀儀礼を掌る史官と、全官府に配当される書記官としての史が存在しているのである。

この構造は、漢代官僚機構でも変わらない。国家の祭祀儀礼を掌る奉常(太常)所属の太史が存在する一方で、各官府には職名に「史」の付く多様な属吏(書記官)が存在した。

そのような漢代官僚制の中で張家山漢簡・史律は、奉常(太常)所属の太史・太卜・太祝の管轄下にある属吏を養成する制度であり、この「史」は一般的な書記官を意味するのではなく、卜・祝と同列に扱われているように、太史所属の暦を中心とする時間の管理を担う、専門職としての「史」であったと考えられる。

ところがやがて、太史所属の史と書記官の史とが混同されるようになり、許慎や班固が生きた後漢初期に至るまでに、史律は書記官の史を養成するための条文に改変され、それが『説文解字』や『漢書』に収録されたのであろう。従って、改変後の律文(「尉律」「蕭何律」)の内容を基準にして、その祖型に相当する律文(史律)の内容を判断することは、本来の姿を見誤る危険がある。

とすれば、許慎・班固・王充という後漢時代初期をともに生きた三人は、前漢後半期的な「史書」の意味は分かっていたとしても、史律に見える前漢初期的「史書」は存在自体を知らなかった可能性が高いといえよう。すなわち、史律の「史書」と文献史料の前漢時代的「史書」との間にも、意味的な断絶があると考えられるのである。

このように考えれば「史書」は、漢初までの術数書↓前漢時代の官文書↓後漢時代の小学書(識字書)↓晋以降の歴史書と、その意味を変えていったと考えられるのである。

〔注〕

(1) 拙稿「張家山漢簡「史律」に見える任用規定について」(『文学部論集』(佛教大学文学部) 九三、二〇〇九年)。

(2) 拙稿「張家山漢簡・史律に見える「史書」について」(『鷹陵史学』三六、二〇一〇年)。

(3) 李学勤「試説張家山簡〈史律〉」(『文物』二〇〇二・四)以来、多くの研究は基本的には書体説を採っている。書体説の中の相違点については、大西克也「史書」とは何か——英藏敦煌漢簡及び秦漢楚地域出土資料を中心として——(『出土文献と秦楚文化』五、二〇一〇年。のち中国語版が「秦漢楚地隸書及関於「史書」的考察」と題して『簡帛』六、二〇一一年に掲載)を参照。なお「史書」に関する研究史は、前掲注(2)拙稿を参照。

(4) 史律では、大史所属の史となった者の中で、成績優秀者(一人)が県の令史になり、また三年に一度の試験での最優秀者(一人)が尚書卒史となる(史律、簡四七五および簡四七六参照)が、書記官としての史の養成という点からこれは、一般的なものではなく「特例」である。この「特例」を、「蕭何律」や「尉律」と同一視して語ることはできない。

(5) 前掲(2)の拙稿参照。

(6) ちなみに大西克也氏は、前掲注(3)の大西論文、および同「文字統一と秦漢の史書」(『書学書道史研究』二四、二〇一四年)で、出土資料の文字を駆使しながら、文字学の立場から書体説を強調する。しかしそこには、錢大昕や段玉裁の説が自明の前提とされているようである。本稿では、このような立場はとらない。

(7) 「史書」の解釈の可能性については、前掲注(2)の拙稿参照。なお、「史書」=官文書説については、汪桂海「官文書及其程式(二)」(同『漢代官文書制度』所収、広西教育出版社、一九九九年)、于振波「史書」本義考(『北大史学』六、一九九九年)、徐剛「史書考」(『燕京学报』新一六、二〇〇四年)などで、史律の存在を知られるより以前から、文献史料の記載に基づいて唱えられ、史律公表後には

臧知非『《史律》新証』（『史学月刊』二〇〇八—一一、二〇〇八年）が「史書」＝「官文書説」を唱えている。

- (8) 晋南北朝期（三世紀後半以降）になると、「史書」が歴史書の意味で使われるようになる。例えば『晋書』卷五一束皙伝に「蓋魏国之史書、大略与春秋皆多相応」とある。これは、『竹書紀年』（＝「魏国之史書」）に関わるものである。また『南史』卷五五曹景宗伝に「頗愛史書、每誦稷卨・樂毅伝、輒放卷歎息曰、丈夫当如是」とあって、これは『史記』を愛読したことを示す。同じく『史記』を指すとみられるものに、『北史』卷二二長孫道生伝に「武帝誦史書、見武王克殷而作七始」という記載がある。

(9) 例えば前掲注(7)の汪論文などに指摘がある。

- (10) 銭大昕は『三史拾遺』卷二で、『漢書』『後漢書』に見える「史書」の事例を引いたうえで、「諸所称『善史書』者、無過諸王后妃嬪侍之流、略知隸楷、已足成名、非真精通篆籀也」と述べた後、本文で引いた『三国志』管寧伝の記事を引いて、何の説明もなく「則史書之即隸書明也」と述べる。これでは、胡昭の「史書」がなぜ「隸書」を意味するのか不明である。

(11) 前掲注(6)大西論文参照。

- (12) 『四体書勢』（『晋書』衛瓘伝）に「魏初有鍾胡二家為行書法、俱學之於劉德升、而鍾氏小異、然亦各有巧、今大行於世云」とある。

- (13) 『後漢書』紀三章帝紀に「（永平）十八年（七五）八月壬子、即皇帝位、年十九」とあり、同紀一〇皇后紀上・賈貴人条には「建武末選入太子宮、中元二年生肅宗、而顯宗以為貴人」とあることから、章帝が中元二年（五六）生まれであることがわかる。

- (14) 食貨志のいう「六甲」や「五方」が何を意味するのか、具体的には不明である。術数関係の書とも考えられるが、初等教育なので「六甲」（『四民月令』に見える「六甲」も含む）は干支（＝時間感覚）の学習、「五方」は方角（＝地理感覚）の学習と考えておく。

(15) 『四民月令』十一月「研氷凍、命幼童誦孝經・論語・篇章、入小学」。

(16) 前掲注(10)銭大昕『三史拾遺』参照。

(17) 『晋書』に見える「聰慧」「聰惠」の事例を以下に示す。まず「聰慧」の事例として、

- ・卷三一后妃伝上・武元楊皇后「后少聰慧、善書、姿質美麗、閑於女工」。
 - ・卷三八文六王伝・城陽王兆「年十歲而夭。武帝踐阼、詔曰、亡弟千秋少聰慧、有夙成之質。……」。
 - ・卷五三愍懷太子通伝「幼而聰慧、武帝愛之、恒在左右」。
 - ・卷六四忠敬王遵伝「初襲封新寧、時年十二、受拜流涕、哀感左右。……由是少称聰慧」。
 - ・卷九二文苑伝褚陶「弱不好弄、少而聰慧、清淡閑默、以墳典自娛。年十三、作鷗鳥、水磳二賦、見者奇之」。
 - ・卷九六列女伝・王渾妻鍾氏伝「數歲能属文、及長、聰慧弘雅、博覽記籍」。
 - ・卷九六列女伝・劉聰妻劉氏「幼而聰慧、昼營女工、夜誦書籍、傳母恒止之、娥敦習彌厲」。
 - ・卷一〇三載記・劉曜伝「幼而聰慧、有奇度。年八歲……」。
 - ・卷一一五載記・苻丕伝「少而聰慧好學、博綜經史」。
 - ・卷一二一載記・李期伝「聰慧好學、弱冠能属文、輕財好施、虚心招納」。
- というのがある。また「聰惠」として、
- ・卷三八宣五王伝・扶風武王駿伝「幼聰惠、年五六歲能書疏、諷誦經籍、見者奇之」。
- というのがある。

(18) 昼に機織り、夜に経書の学習をした事例として、前掲注(17)にも掲げた『晋書』卷九六列女伝・劉聰妻劉氏の「幼而聰慧、昼營女工、夜誦書籍、傳母恒止之、娥敦習彌厲。每与諸兄論經義、理趣超遠、諸兄深以歎伏。性孝友、善風儀進止」というのがある。彼女の例は、鄧皇后を彷彿とさせるものがある。

(19) 『三国志』卷五本伝に「后年十餘歲、白母曰、今世乱而多買宝物、匹夫無罪、懷璧為罪。又左右皆飢乏、不如以穀振給親族鄰里、広為恩惠

也。挙家称善、即從后言」とある。

- (20) 『後漢書』から若干(二〇歳以下)で儒家文献に通じた者の例を挙げると次の通りとなる。馬嚴(伝一四)・七歳で『論語』に通じる。范升(伝二六)・九歳で『論語』・『孝経』に通じる。馮衍(伝一八)・九歳で『詩』を誦む。班固(伝三〇上)・九歳で文を属り、詩賦を誦む。周燮(伝四三)・十歳で就学、『詩』・『論語』に通じる。なお若年時の学習については、東晋次『後漢時代の政治と社会』(名古屋大学出版会、一九九五年)第三章「儒学の普及と知識階層の形成」(一九八四年初出)を参照。

- (21) 本文で引いた『東觀漢記』の記事の前に「少聰明敏達、慈仁惠和、寛容博愛、好楽施予。自在邸第、数有神光赤蛇嘉応、照耀於室内。又有赤蛇盤紆殿屋床第之間、孝王常異之」とある。

- (22) 『漢書』元帝紀に「鼓琴瑟、吹洞簫、自度曲、被歌声、分判節度、窮極幼眇」とある。

- (23) 郡文学については、拙稿「漢代の郡国文学——尹湾漢墓簡牘の事例をてがかりとして——」(『鷹陵史学』二八、二〇〇二年)を参照。

- (24) 当該箇所師古注に「以施行詔條問之、皆曉其事」とある。

- (25) 『論衡』程材篇の解釈については、大久保隆郎「王充の人材論(二)」(同『王充思想の諸相』所収、汲古書院、二〇一〇年)も参照。

- (26) 『漢書』貢禹伝に「今欲興至治、致太平、宜除贖罪之法。相守選舉不以実、及有臧者、輒行其誅、亡但免官、則争尽力為善、貴孝弟、賤賈人、進真賢、挙実廉、而天下治矣」とある。なお本文では引かなかったが、贖罪の法廃止は、文帝の善政を示すものとして貢禹は語っている。

- (27) 「善書」については、前掲注(7)汪論文の分析がある。

(に)しかわ としふみ 歴史学科)

二〇一五年十一月十六日受理